聖潔の源

259
695

此書はダービー氏の"The True Source of Sanctification"を譯したるものなり

讀者先づ羅馬書第七章及び第八章を熟讀し然る後此書を讀まば益するところ多かるべし

特51
283

聖潔の源

我等の心に常に神の恩寵を覺えをることは餘程六ケ敷ことなり。即ち實際に『我等法律の下にあらず、却て恩寵の下にあり』(羅六章十五)と云ふことを、絶へず覺へをることは容易からざる也。我等の心が堅固ふせらるゝは、全く神の恩寵に由ることなるが、實際に恩寵の充盈を了解し、『我等が立つ所の』(彼前五章十二)神の恩寵を知りて、其の恩寵の力に歩み、又之を覺へつゝ歩むことは、此上もなき六ケ敷ことなり。さて神の御前に居ることは我等信者の特權なるが、神の恩寵を知るは唯だ此の神の御前に居りてのみ知り得るなり。我等神の御前を離るるや否や、直に我が衷に自分の思が働き始むるものにて自分の思は決して神が我等を思ひ給ふ其思ひ、即ち神の恩寵に屆くことはできざる

特51
283

聖潔の源

我等の心に常に神の恩寵を覺えをることは餘程六ケ敷ことなり。即ち實際に『我等法律の下にあらず、却て恩寵の下にあり』（羅六章十五）と云ふことを、絶へず覺へをることは容易からざる也。我等の心が堅固ならざるときは全く神の恩寵に由ることなるが、實際に恩寵の充盈を了解し、『我等が立つ所の』（彼前五章十二）神の恩寵を知りて、其の恩寵の力に歩み、又之を覺へつゝ歩むことは、此上もなき六ケ敷ことなり。

さて神の御前に居ることは我等信者の特權なるが、神の恩寵を知るは唯だ此の神の御前に居りてのみ知り得るなり。我等神の御前を離るるや否や、直に我が衷に自分の思が働き始むるものにて自分の思は決して神が我等を思ひ給ふ其思ひ、即ち神の恩寵に屆くことはできざる

昭和
49 10 20
内交

也。また、我等先づ恩寵の大土臺、即ち神が御子イエスを賜ひたることを能く心に會得せざる内には、恩寵の意味を正當に知ることはできず、又我等己が心を以て理屈を考へても決して神の恩寵の意味を知ることはできざる也。何故ならば既に恩寵と云ふ以上は、神より直接に又た償なくして流出るにあらざれば恩寵にはあらず、受くべき權利が毫く少しにてもあるときには純粹なる價なき恩寵にはあらず、即ち『神の恩寵』にはあらざるなり。

我等『當ひて主を恩ある者と知りたる』後にても、若し神の御前を離るゝときには直に自分の思が働くは素より當然のことなり。而して自分の思が我罪に就てか、又は我が受けたる恩寵に就てか、又た其他我等が關係する何事に就てゞも働き始むるときは、我等直に恩寵を忘れて、最早や實際に恩寵に信用を置くこと能はざるなり。神の御前を去ることは、諸の弱きことの原因なり。そは我等は神の能力に由て一

切の事を爲し能ふ者なれば也。『若し神我等の味方ならば誰か我等に敵せんや』。神の御前にあることを覺へをるときには我等何事にも『勝て餘あり』。神の御前に於て思ふときには自分の事を考へ、又は周圍にある物事に就て思ひても何事も容易くわるなり。而して我等が一切の事を神の恩寵に從ひて判斷することを得るは唯だ神と交を保ちをる時に於てのみできる事なり。譬へば自分の事を思ふとするも、我等若し神の御前に於て其恩寵に息みをるときならば何者も我を煩はすこと能はざるべし。我等『神の選びたる者を訴ん者は誰ぞや』『罪を定むる者は誰ぞや』『キリストの愛より我等を離せん者は誰ぞや』といひて心を安んじをることを得るなり。然れども若し神の御前を離るゝときには、神と交を保ちをりし時の如く、最早や其恩寵に安んじをること能はざるなり。又た我等の周圍にある物事の有樣を見て、凡その者は罪と惡と不幸と零落の中に沈みをるを感じて我靈に悲をもつ

ことあらん。（主イエスは實に周圍の有樣の爲めに心を働ましめ身ふるひたり」約十一章卅三）。然れども神の御前を覺えをるときならば如何に周圍の有樣を悲むも、之が爲に我が靈魂を損はるゝことなし。假令ひ教會の有樣の爲に悲むも我は之に由て動かさるゝことなきなり。そは我等神御自身に信用を置くが故に、一切の事は却て神の恩寵の働に機を與へ、又た其働の場面となるのみなり。

人の天性は決して神の恩寵に信用を置くことあらず。而して神が憐憫を以て罪を見遁しにするならんと思ふことはあるなり。何故に此の如く思ふかと云ふに、天性は神を罪に就て無頓着なる御方の如く思ひ、（人の天性自ら罪を輕く見るゆゑに、神もまた然るならんと思ふなり）、又は神が罪を審くの權を有ざる如く思ふに由てなり。然れども我等若し我靈魂に於て恩寵の意味を會得せば、抑も恩寵なるものは我が考へし所と全く反對なる者たることを知るべし。即ち恩寵とは神が罪を無頓着に看遁しにせしことの謂にあらずして、却て罪の甚だ惡しき其直打を充分に眺め給ふことより起りたるもの也。我等若し我が小き分量に於て、神が如何に罪を憎みたまふかを學ばせらるゝときに、我等は此の惡むべき罪を悉皆取除き得たる神の恩寵を見て、驚き又頌めざるを得ざるべし。實に神は其恩寵に由て御自身の御子を與へて罪の爲に死せしめ給ひたり。然るに性來なる人の思ふ所の神の憐憫とは、神がイエスの血に由て罪を取除き給ふことにあらずして、唯だ神が無頓着に由て罪を見遁すこと是れなり。而して之は決して恩寵にはあらざる也。

良心が眼を醒し、恩寵を知らずして責任を思ふときには、必ず先づ己を律法の下に置んと勉む。其他の事は爲し得ざるなり。性來なる人すら屢々此のことを爲すなり。彼は律法に從ふことの外に神を悅ばす途を知らず。而して彼神を知らず、又た自分をも知らざるが故に、彼

は律法を守り得るやうに自ら考へをるなり。然れども恩寵の意味をいと單純に思ふことが、我等クリスチャンの力と勇氣の眞の源なり。而して神の御前に於て恩寵を覺えて歩むことは、信者が聖きことゝ平安と喜樂とを保つ唯一の秘密なり。

茲に靈魂の平安を妨ぐべき二の事あり。此の二を屢々混亂し、雜合するが故に聖徒の心に困難を來らする也。

第一、神に受納らるゝ事と、救に關する良心の苦、

第二、羅馬書八章廿三節に錄されし如く、周圍の事物我を惱まし、我を試むることのために我靈に悲歎ある事、

この二の苦は全く相異る者なり。聖徒が此世界に住みをる間に、周圍の物事のために靈を痛め、魂を働かすることは、罪の赦に就て良心の苦あると全く反對の事なり。若し此良心の苦あるときには己を中心となしをりて、他に對するの愛は働らきをらず。然れども周圍の有樣の

ゆゑに靈に苦あるときには之と全く反對なり。主イエスが此世を渡りたまふ間に、其靈魂に感じ給ひたる重荷は如何に大なる哉。而して此苦は皆愛より流れいで、完全に神の恩寵を感ずることより起りたる也。我等恩寵の何たることを充分に即ち單純に味ひ、神が我等の爲に働きたまひつゝあることを知りて神に依賴み、神は即ち愛なる事を知るときには、右に述たる二の苦を混亂するの氣遣なし、然れども若し恩寵の意味を了解せざるときには直に之を混亂するの傾あるなり。

若し我等己が受納れらるゝことに就て良心の心配あらば、是れ未だ充分に恩寵に堅固せられをらざるが故なり。素より恩寵に堅固ふせられたる聖徒と雖も我が衷に罪のあることを感じをるなり。然れども之は受納れらるゝ事に就て良心の苦惱あるとは全く異ること也。

さて又た平安なき事に二樣あり。

第一、未だ神の恩寵に充分に依賴まざるより救に關て不確なること

と、

第二、救に關ては疑はざれども不注意の爲に恩寵を忘れ(是は實に忘れ易きものなり)たるに由て心落付かざること。

『神の恩寵』は實に無限なるものなり。また充足れる者なり。また完全なる者なるが故に、唯だ神の御前に於てのみ之を味ふことを得るなり。我等自分には更に之を了解するの力あることなし。我等瞬時にても神の御前を去るときには決して眞に恩寵を覺えをること能はざるなり。若し御前の外に於て之を知らんとせば必ず恩寵を變へて不法我儘となすに至るなり。

我等若し恩寵とは如何なる者なるかと云ふ單純なる事實を見なば、實に恩寵は限りなくまた極なき者たるを知るべし。如何にも我等は此上に惡くなることの出來ざるほど惡きものなるが、我等が如何にあるに拘らず、神が我等に向ひたまふことは愛なり。而してキリストに

より正義を以て我等を愛し給ふなり(羅五章廿一)我等の平安は我等が神に對して如何にあるやに由るにあらずして、神が我等に對して如何にあり給ふやに由るなり。是れ即ち『神の恩寵』なり。之を思ふて我等は喜に溢る。

恩寵は我等の罪を見遁にするに非ずして、我等の凡の罪と惡とは之を其儘に罪として認め、而してイエスによりて此の凡の罪と惡とが悉く取除かれたる事を我等に敎ゆ。神が唯だ一の罪を憎み給ふことは、我等が數千の罪、否、全世界にある凡の罪を憎むよりも甚し。而して神は我等が如何なる者なるかを充分に御承知の上にて、我等に向ふには愛を以て向ふを好しとし給ふなり。人の言葉にて言ふときには、或人は重罪人にてあり、また或人は輕罪人なるべけれども、此等の事は少も言ふに及ばず、罪惡の大小を論ずるは無益のことなり。蓋は恩寵は我等が如何なる者なるやを問題とせず、神が如何なる御方なりやと云ふ

にありて、我等の罪の甚だ大なることが、却て神の恩寵を益々大ならしむることの外は、我等の如何は更に恩寵に關係なきなり。但し我等之を知らざるべからず、即ち恩寵の目的及び自然の結果は、我等の靈魂を神との交に導くにあり、即ち靈魂をして神を知り、神を愛するやうにあらしめて我等を潔むるにあるなり。故に神の恩寵を知ることは聖潔の眞正の原因なり。

此の如く恩寵とは我等が如何にありやと云ふことにあらずして、神が我等に對して如何にあるかとのことなるが故に、我等若し己を眺めて、神が我罪のために我を審判き給ふならんと考へ始むるときには、最早や恩寵の中にあることを實際に覺へをらざること明なり。人の心には素より己を眺むることは自然に備りをれり。而して此思の起りたるときは是れ心の眼の覺めたる一の結果なり。そは此時良心は直に神が己を如何に思ひをるかを論じ始むればなり。然れども之は恩

寵にはあらず。我等の靈魂もし自ら己を顧みて神が我を如何に思ひ給ふかを知らんと欲し神が我を如何に取扱ひ給ふであらうかを考ふるときには、是れ我等は神御自身の如何なる御方なりやと云ふことに依りすがりをらざる也。即ち神の恩寵の中に立ちをらざるなり。

前に陳べたる通り茲に二種の苦あり、二者全く相異る者なれども聖徒の心の中にて往々混雜し易きことなり。第一、良心の苦。第二、周圍の惡のために靈につける人に歎ある事なり。我等若し恩寵を覺えることが少しにても鈍くなるときは、此の二のことを混亂するの恐あり。譬へば我等わが周圍の有樣を見、其惡の甚しきに感じて歎くことあらんに、若し注意して防がざれば此の歎を、我良心の苦と雜合するに至るべし。此時には我等神の愛を忘れて己を律法の下に置くなり。然れども我等少しも神の愛を忘るゝことなしに此の歎を爲すことを得。否却て神の愛を感ずるが故に歎くなり。主イエスがラザロの墓

に於て心を働まし泣き給ひし時を見よ。主は罪のために此世に入りきたりたる不幸を極めて深く感じ給ひたるが、之がために彼は父なる神の愛を感じ給ふことを少しも妨られざりしなり。曰く『父よ我爾が爾に我に聽くことを知る』（約十一章四十二）此の如くクリスチャンは甚だ悲哀の人たるべく、然れども之が爲めに神は愛にあらざるが如く感じ、神の恩寵を忘るゝが如きことはなかるべき筈なり。他人を愛するの愛と靈の眼を以て周圍にある惡を見ることよりして、我等は多くの悲をもつなり。主イエスは我等よりも極めて多く之を感じ給ひたり。彼の心の中にある愛の力は、周圍にある人類が惡のために苦みをる其恐ろしき不幸を深く感ぜざるを得ざるなり。誠に主は御自身が父の御前の幸福と愛とを知る比例に、周圍の人々の不幸を感じ給ひたり。我等また羅馬書八章に錄されたる通り『苦』『歎』等あり。

パウロは弱きこと、困難、試等を感じて自ら心の中に歎きたり。但し之が爲めに神の恩寵を不確なるが如く思ふやうなることは決してなかりし也。否な却て之に反して我等聖靈が我中に住りたまふことを多く感ずれば又多く歎くべし。我等祝福を確かに知れば知るほど恩寵を多く實際に味ふべし。我等神の愛と、此愛の結果を多く知れば知るほど、現時我が周圍にある諸のものを見て多く歎くべし。而して此歎の爲めに神の慈惠を少しにても疑ふが如きことはなき也。パウロが其靈に歎あることを言ひたるは彼その立つ所の恩寵の結局を確かに味ひ、且つ信仰の力に由りて己に屬する祝福を感ずるが故に、彼は之を戀慕ひて自ら心の中に歎きしなり。彼は彼に對する神の慈惠の如何にも充盈ることゝ、自由なることに就て最も明了に悟らされをるが故に、之を感じて自ら心の中に歎きて子とならんこと、即ち肉體の救れん事を待ちし也。

羅馬書七章の終に全く異る種類の歎を記せり。但し前にも言へる

如く、此等の二様は屢々混亂せらるゝなり。是れ罪性が尙ほ我等の中(卽ち我等の肉の中)に宿りをるが故に、未だ眞實に恩寵に堅固せられざる人々は、此兩者の相違を識別へざるによる。此章は人々が經驗とよぶ所のものにて充されたり。但し(正しく言へば)信者たる經驗にあらず。唯だ內なる心、意の思想にして且つ心意自身に就ての思想なり。彼處に記されたる所は、一の活されたる人に就て記せり。然れども其言ふ所論ずる所悉く彼自身を中心とせり。『我』『々』『々』と幾度言ふかを見よ。實に全文を通して『我』に充されたり。第十四節を注意して讀め。『夫れ律法は靈なる者と我等は知る』——然り凡の信者は左樣に承知しをれり——『然れどわれは肉なる者にして罪の下に賣れたり』と、最早や我等と言はずして我といふなり。彼直に回顧りて己を眺め、而して(彼は活されたる者なれば)律法の下にある者として己が經驗に由て己を判斷し、且つ神が彼に對して如何にあるやを思はずして、彼が神の御前に如何なる者なるやを論じ始めたり。而して其結果は左の歎息の言となれり。曰く『噫、我困苦人なる哉、此の死の體より我を救はん者は誰ぞや』。

我等若し自ら己を論じ始めなば、『噫、我困苦人なる哉』と云ふよりほかになし。我如何にしてよからんか。我は罪を憎むなり。我は神を喜ばせんことを希ふ。我律法は善なる者と知れり。然れども我律法の善なる者なることを知れば知るほど我に取りては律法は不都合なるものとなりて、我は益々不幸なり。我等若し己を顧み、且つ己を律法の下にある者と思はゞ是より外になき也。此の七章に陳べたる所に恩寵の言は一言たりともなし。終に心キリストに向ふに及びて、初めて神に感謝することを得たり。曰く『我れ我主イエスキリストに由りて神に感謝す』。

素より此七章には、茲に記せる一個人の經驗として多くの眞理を記

されたり。然れども未だ恩寵まで至らざる眞理なり。卽ち彼の有樣は如何にあらうとも、彼が出來得るだけ惡しくあるとも、神は愛なり。神は唯だ愛を以てのみ彼に向ひ給ふと云ふ、單純なる事實を述べず。彼は神を眺むる代りに、唯だ『我』『々』『々』と云ふのみなり。第十五節の如きは、六たび彼自身及び其思念のことを言ひたり。而して是等の言の中、素より靈につけるものありと雖も、尙ほ『我が惡む所我之をなす』『我善を行はんと欲ふときに惡我に居る』云々に過ぎず。此章に記されたる經驗は、我等をして己に全く見込のなき事を悟らしむるには有益なる經驗なり。然れども唯だそれだけのことにして之は(正しく言へば)信者の經驗にあらず。卽ち我等尙ほ力なかりし時、キリスト定りたる日に及びて我等の爲に死たまへり(羅五章六)といふ單純なる事實を未だ充分に、又た實際に味はざる靈魂の感情を記せるに過ぎず。

信仰卽ち(尙ほ適切に言へば)新人の意を以て律法を見るときには、天性を以て見る所よりも、遙かにまさりて律法の靈なる者たることを知り得べし。又た肉を見るときには、實際に肉の甚だ惡しきことを見るなり。此故に若し律法と肉とを見るのみに留りて、律法に由りて己を判斷するときには、必ず律法に由りて罰せらるべき者たることを感じ、己が罪惡と弱きことゝを覺るの外なし。此時我等惡を憎み、惡より離れんと希ふならん。然れども唯だ夫れだけのことにして、『噫我困苦人なる哉』と叫ぶに過ぎず。實に光が增せば益々不幸を增すなり。然れども信仰が神を眺め、恩寵に於て神の御自身を現はし給ふたるを見るときには、是に從ひて判斷するなり。此時には最早や決して結びたる果を論ずることなくして、神が御自身を現はし給ふたる啓示卽ち恩寵に息むなり。勿論恩寵の果は望むべき者にして、若し我が中に生命あらば、聖靈の結ぶ果を見ることを得べし。譬へば聖徒十字架の血に由りて平和の成就せしことを知るときには、其結果は之より愛が流

出るなるべし。彼己が大なる福に召かれたることを感ず。此故にかれは『和平なる福音の備を靴として足に穿くべし』。かれ神の愛をその靈魂に呑むときに、かれは他の人々にまで流出る愛の泉となるべし（約七章世八）。然れども此等の果の生ずるに拘らず、信仰は其自身の果を論ずる者にあらずして、唯だ神が『恩寵の神』として御自身を現はしたる其啓示にのみ安んずるなり。これが信仰の正當の働なり。人の心なるものは常に其自身に就て論ずる者にて、其自身より遂に神に及ぼして神を論じ、神が我等に向て如何にあるであらうかを考ふるなり。而してクリスチャンに於ては、心は常に果を見て判斷しつゝあり。我等若し我心を以て己を論じ、我が結ぶ所の果を以て己を判斷するときには、決して平安を得る能はずして、必ず不安心を來らすなり。肉を見れば肉の外何もなきを見る。我が結び得たる最上の果を見るに、是すら不完全なること甚しく雜りをりて、唯だ審判にのみ適當のものたり。故に此等を見て平安を得ること能はざるなり。唯だ我等主イエスの成就たまひたる事を眺めてのみ、始めて平安を得べし。即ち『キリストイエスにある恩寵』の中に平安を得るなり。

第七章に於てパウロは先づ第一に信者は『律法に死し者』なりと云ふ大主義を確め、而して一の活されたる靈魂の働を記せり。此靈魂は『律法は靈なる者』なることを知る。而して自分が尚ほ『律法の下』にあることを感じをるなり。故に遂には『噫我困苦人なる哉、此の死の體より我を救はん者は誰ぞや』と叫ばざるを得ざるなり。彼は此所に於て誰に就て考へつゝありや。唯だ己をのみ思ひつゝあり。親愛なる友等よ敢て問はん。信仰の目的は我、又は我の有樣なるか、否決して然らざるなり。信仰は決して我心にある所のことを其目的となすにあらずして、神が御自身を恩寵の中に現はしたることを目的とするなり。然るに我等若し半途にして留り、唯だ律法をのみ見てをる

ならば、律法は我の罰せらるべき者たることを我に教へ、而して我の全く力なき者なることを證する也。神若し我等が律法を充分に知ること、また此章に記されたる經驗を知ることを許しおきて、己が眞の有樣の如何なるかを示したまはゞ、此處ぞ丁度恩寵が我等に出合ふ所なり。

茲に言ふ所の戰は絶へず無くなるにはあらず、此戰のなきは更生らざるものなり。我等恩寵を充分に知りて後にても此戰はある也。然し戰を爲す中に律法は靈なる者たることを見、自分は肉なる者にして罪の下に賣られたる者なるを見て、我靈魂に於て大なる苦を感ずることは、恩寵を味ふて後には決してなし。神の愛を我がものとして味はざるゆゑ、噫、我困苦人なる哉と叫ぶに至るなり。

我等第七章の經驗を感じをる間は、未だ神の恩寵を單純に信ぜざる者たることは明なり。未だ神がキリストに在て、我等に對して如何なる思を抱き給ふやを知らざるなり。何故と云ふに靈魂が此の恩寵を味ひ、新人の管能が正當の目的に向て働を爲しをるときには、必ず全き平安あれば也。勿論此の如きの時と雖も戰爭なきにはあらざれども、此の戰爭は我が戰爭にあらずして、主の戰爭なるが故に、我が靈魂は全く平安に居る也。

我等如何にして神が我に對して有ちたまふ御心を知るべきものなりや。我己を眺め、我にある所のものを見て、之に由りて御心を判斷すべきや。極めて否らず。若し我が中に善を見出すと假定するも、此の善に由て神が我を眺めたまはんことを望まば、これ卽ち恩寵にあらざるなり。素より我が靈魂に生命あらば、其果は現はるゝに相違なきが故に、我が善を神が見たまはんことを期するは一應尤の考へなれども、我等この事によりて平安を得る能はざるは、我が中にある惡に由りて、我が平安を得るを妨げらるゝと異らざる也。パウロが『律法は靈なる

者と我等は知る、されど我は肉なるものにして……』と云ひ、『噫、我困苦人なる哉』といひたるは是れ眞の申分とす。然れども更に恩寵にはあらざる也。

然らば恩寵の確かなることの故に由りて、我等は全く困難を免れ得るものなりや。非ず。我等この罪深き肉體に居る間は、常に肉と聖靈との戰あるは實際なり。然れども此の戰爭を爲すに、我恩寵の下にあるゆゑ、神は我味方にいますと云ふことを思ふて戰ふと、我律法の下にある故、神は我を責むるの位地にいますと思ふて、恐れながら戰ふことは非常の相違あるなり。我若し我内に惡あることを見、我等地上に在る間は、假令その果に現れずとも、惡の根は存しをるなり、而して之が爲に神は我を責めたまふと思はゞ、我等は全く失望落膽して己が神に受入れらるゝことに付てのみ苦みをりて中々肉に逆らひて戰ふなどの力はあることなし。然れども神が我が味方にいますことを確に知らば、之を思ふことに由りて我は勇氣と勝利とを得、而して『神よ願くは我をさぐりて我心を知り、我を試みて我諸の思念を知りたまへ。願くば我によこしまなる途のありやなしやを見て、我を永遠の途に導きたまへ』(詩百三十九篇廿三、廿四)と云ふことを得べし。我等若し神の愛と恩寵とを思はざるときには、決して斯く願ふこと能はず、蓋は神にかく探られては、我失望に沈まんことを思ふが故なり。然れども我等神の愛と恩寵とに信用を置くによりて我中にある凡の惡を探り出さんことを神に願ふを得べし。實に神は我友にいますなり。神は我味方にいまして、我自身の惡に逆ひて戰ひ給ふなり。

使徒は『肉の心』は神に敵するものなることを云へり(第八章)。然る所、神は御子イエスを賜ふことに由りて、最も福なる一の眞理を明にしたまへり。即ち人が神に逆ひて敵たりし其時に、神は人に對して愛なりしと云ふ福なる眞理を示し給ひたり。神の恩寵の勝利は是れな

り。即ち人の敵心が、イエスを地上より追出したる其時に、神の愛は却て此の惡行によりて救を持來りたり。此時神の愛は御子を憎み棄てたる者等の罪を贖ふために働きたり。我等信仰を以て見るときは、人類の罪が最も充分に發達して極度に達したる其處に於て、神の恩寵の最も充分に隅なく現はれてをるを見るなり。人の罪惡と、神を憎むとの最も深き往きつまりは十字架なり。而して神が人に對する愛(打勝つ愛)と矜恤は亦た此處に於て最も大に現はれたり。視よイエスの脅を刺したる兵卒のその鎗は、却て愛と矜恤を示す所のものをこそ呼び出したれ。

使徒は更に進で、一たび神の敵たりし者、今は神の後嗣たり。而して神の後嗣たることを知るは、先づ神の恩寵を知るに由りてなることを示せり。『爾曹が受し靈は奴たる者の如く復び懼を懷く靈にあらず、アバ父と呼ぶ子たる者の靈なり』。神の恩寵は先づ我等を神の兒輩とな

し、而して此事を我等に知らしめ、また我等が神の後嗣たることをも知らしむる也。實に我等に施す神の恩寵は如何に大なる者ぞ。此の恩寵は主イエスの有てる所と同分を我等に與へたり。即ち我等は神の後嗣にしてキリストと偕に後嗣たるもの也。神の恩寵は我等が尚ほ罪の中にある其處に來りて、我等に出會ひたるのみならず、其處より我等を引出して、キリストの居る所に坐せしめたり。我等は主イエスが神としての固有の榮の外は、凡の事に於て彼と同樣のものとせられたる也。斯の如く神の完全き愛を味はせられたる靈魂は福なる哉。其時我等は實際に神を喜びをることを得るなり(羅五章十一)。我等若し少にても神の愛に就て疑を抱くときには、既に恩寵を離れたるなり。其時には自分が自分の註文通りにないことを見て苦み始め、甚だ不福を感ずべし。然れども我等恩寵の下にあるが故に、我を問題とせずして神を眺め、神は我が註文通りの御方なりや、主イエスは我が願ひ通り

の御方なりやとの事を味ふて喜ぶべきなり。我は如何なる者である と云ふことを感じ、我の中に見出す所のものを眺むることに由りて我等自ら己を卑ふし、益々神の如何なる御方なるやを貴びあがむれば即ちよし。若しも此他の結果に立至らば、我等既に純粋なる恩寵の場所を離れをる也。我の如何なる者なるかを感ずることは、必ず自ら己を卑ふする結果となり、同時に我等の心神御自身にまで届き、我は如何なる者であると云ふことの上に溢れをる恩寵に屆かんことを要す

我等實に恩寵によりて我が靈魂に全き平安を保たさるゝことなるが、是によりて悲を悉く免るゝこと能はず。我等の主イエスは地上の御一生に於て、周圍の有樣の悲みと歎とを充分に負ひ給ひたり。彼は『悲哀の人にして病患を知れり』(賽五十三章三)と錄されたるが如し。然れば我等も亦た小き分量を以て、此世にある所の惡の重を感じ、悲哀の人となるべき也。我等恩寵に居れば居るほど、周圍の惡の重みを感じ而して歎き苦む所の受造物と共に我等もまた歎かざるを得ざるなり。且つ又た我等も身に居るが故に『自ら心の中に歎きて子とならんこと』即ち我等の肉體の救はれんことを待つ』なり。

此の歎は我等の救の不確なる思をふくむものなりや。否、決して然らず。却て其反對なり。萬物は我等のものたる(哥前三章廿一)を確に知るが故に、此の歎をなすに至りしなり。又た我等己が受んとする榮を確に知り、豫め之を味ふがゆゑに、之に比較して、今見る所の凡の事物は一層我を悲くする也。我等聖徒の受くべく、出逢ふべきことは、現時我が周圍にある所の一切のものと甚しく異れり。故に我等神の御前に居ることの喜を多く知れば知るほど、又た神の愛と恩寵とを一層深く悟れば悟るほど、又た我等が豫め定められたる榮に於て我等の分の如何に福なるかを多く味へば、味ふほど、我等は一層多く歎くに至るなり

この歎は不安心なる良心の歎と異ること甚だ大なり。我等二の歎を混亂せざらんことを要す。一は第八章に記されたる如く、刑罰の懼少もなき人の歎なり。他は第七章にある噫、我困苦人なる哉と云ふ所の、夫の良心の歎なり。

一たび贖の力を知り、此の力の中に立ちをりし聖徒も、歩の等閑なるが爲めに、又之によりて恩寵の感を失ふことのために、靈魂の悲痛に沈むことあり。然れども彼實に贖を知りをるならば、救を疑ふが如きことはなき也。但し信仰の盾を倒すが爲に、惡者の火箭に打たれ、之に由りて救の安心を失ふの場合あり。此の場合には最早や疑ふこと、求ることなどを過去りて、殆ど全き失望となり、靈魂の有樣、全く別なる有樣となりをるなり。我等の心、若し眞にキリストの豐なる祝福を以て充さるゝときは、己を眺めて自ら害ふが如きことには陷らざる也。

『キリストイエスに在るものは今刑罰なし』と云ふことを知り、『キリストイエスにある生命の靈の法は罪と死の法より我を自由にせり』と云ふことを知るは、我等聖徒としての特權なり。然れども我等此處にて留らず、尙ほ進で我等神の子たるの福、神の後嗣にして、キリストと偕に後嗣たることの福を知らざるべからず。我が中に住りたまふ聖靈は、我等の靈と偕に我等が神の子たることを證し給ふなり。神は我等をキリストに堅固し、且つ我等に膏を沃き、我等に印して質として靈を我等の心に賜ひたり（哥後一章二十一、二十二）。我等此の如く、神が愛を以て我等を思ひ給ふたることを充分に知り、又神は其子イエスの狀に倣はせ、彼の榮光に偕に與らしめんと、豫め我等を定め給ひたることを確に承知し、且又神が今の時に於て、如何に愛を以て我等を取扱ひ給ふかを味ふに、一方に於ては、我等未だ定められたる通り榮光を受けず、尙ほ弱き肉體に居り、且つ四面罪惡と歎の眞中に居るが故に、我等は之が爲めに歎ざるを得ざるなり。『聖靈の初めて結べる果をもてる我等

も自ら心の中に歎きて子とならんこと、即ち我等の肉體の救はれんことを待つ』。我等が歎く其故は、全く聖靈の初めて結べる果をもてるが故にして、良心の苦あるがゆゑにあらざる也。キリストの靈、我等の中に在て歎きたまふ、その歎に我靈も一致するなり。

さて此の歎は必ず神に信用を置くことゝ伴ふ。主イエスがラザロの墓に於て、心を働ましめ身戦ひたまひたる其時に、父なる神に向ひては、『我爾が恆に我に聽くことを知る』(約十一章四十二)と曰ひ給ひたり。我等もまた同じ信用を神に置くことを許されをる也(約一書五章十四、十五)尚又我等は祈るべき所を知らざる時にも、矢張り此の信用を神に置くことを得、蓋は『凡ての事は神を愛する者のために悉く働きて益をなすを我等は知る』を以てなり。我等わが中に惡のあるを見、又他の聖徒の事を思ひ、或は教會の有樣を憂ひて、此等のことに就て祈らんとするときに、之を救ふの方法に付ては十分に知らずとも、聖靈我等の往弱を助けて、我が中に歎きたまふが故に、神は我等の愚なる事に目を留め給はずして、聖靈の意に循ひて答へ給ふなり。蓋は聖靈は恆に神に適ひて、聖徒の爲めに祈りたまふがゆゑ也。

我等神が凡ての事を司り給ふことを篤く信じて、凡ての事は悉く働きて益をなすに相違なしと云ひ得んこと肝要なり。然るときには如何なる事に出逢ふとも、我は決して動かさるゝ事なし。困難、悲痛、失望、慨歎、其他如何なることが出で來るとも、是等は少も我が平安を損ずること能はず。我は神御自身に依りすがり、其愛に息みをりて、夫の第七章にある如く己を眺むることなきにより、常に變らずして全き平安を保ちをる也。

我等が歎く其歎は、實に神の洪大なる愛を知る事と、凡の物はキリストに在て悉く我が屬なる事を感ずるより起るなり。イエスは凡ての人にまさりて、神の御前の如何に福なるやを知り、又神の慈惠を味ふこ

との如何に福なるやを知りたまふ御方なり。而して歎き悲みたり。そは彼人々の此の福なる御前に居らざるを見るがゆゑなり。我等が今有つ所の新き生命は、我を律法の下にある者として責任の所に連れ來らず。我が爲に我刑罰を負ひ給ひたるキリストと同樣ならしむる也。故に我等は律法の下にある者の如く、己を眺めて苦まず。常にキリストイエスに在る贖を思ひ、神の恩寵の中に息み、且つ神の榮を望みて喜をなす也。而して我等キリストの榮光を我がものとしてチラリと見ることを得るや否や、我眼には此の世が不幸と奴隷の憐なる場所と見へ始むるなり。

又惡の爲に歎くことは、必ず愛と伴ふなり。譬へば我等一人の聖徒が罪を犯すを見るときに、我は直に彼が神の愛と、恩寵に逆ひて罪を犯しをることを思ひて、我心は直に此の愛と恩寵に導かれ、彼に對する神の慈惠を感ずる所より、我は彼の爲に心配するなり。故に我は彼の罪

に就て憂ふれども、此悲歎の中にありて、自分は神を喜びをるなり。

親愛なる我友等よ。是等のこと果して然らば――即ち恩寵に由りて、我等此の如き地位に居る者にてあるならば、我乞ふ敢て汝に問はん。汝は此の福を實際に味ひをるや。夫れ神は純粹の愛にして、我等に對して愛のほか何もなく、彼の御胸の中には更に雜りたる感なきに、汝尙ほ未だ滿足れる喜樂を有たず、或は汝が神の前に立つことに就て、尙ほ汝の靈魂に疑あらば、汝は未だ神の恩寵に單純に息みをらざる也。若し汝の心の中に疑念と苦痛とあらば、是れ汝尙ほ『我』『々』『々』と云ひて、神の恩寵を眺めをらざるが故にあらずや。友よ、汝は實に信仰を有ちをるならん。然れども汝單一に神の恩寵を眺むることなきに由りて過てり。我等は己が如何なる者なるやを思ふよりも、神の如何なる御方なるやを思ふをよしとす。斯く己を眺むる事は、其歸する所實は傲慢なり。是れ未だ我等は少しも取りどころなき者なることを充分に

感ぜざるによる。我等己の中に、聊かも取りえなきことを實際に感ずるまでは、己を見ることを止めて、神を眺ひる事は決してなさゞる也。或は時としては、己が惡を眺ひることは、幾分か己の全く無益なることを知るの端となる事もあり。然れども是れにては未だ不充分なり。我等キリストを眺ることに由て、己を忘るゝはこれ我等の特權なり。己を惡く思ふことは謙遜に似たれども、眞正の謙遜は寧ろ少も己に付て思ざることにあり。我は我に就て更に思を費すに足らざるほど賤き者なり。我等願くは己を忘れて神を眺めん。神は實に我が思を悉く費して思ふの價値ある御方なり。而して我等若し謙るの必要あらば、神御自身を眺むることは、必ず己を謙らしむるものなりと知るべし。愛せらるゝ者よ。我等若し夫の第七章にある如く『善なる者は我即ち我肉に居らざるを知る』と云ふことを得ば去にて居れり。我等己を考ふることを止めて神を思はん。神は我等が更に己が事を考へざるし、其先より、善き思を以て我等を思ひ給ひたり。我等願くは神が我等を思ひたまふ恩寵の思を眺め、而して信仰の言を取て喜び樂まん。

曰く『若し神我等の味方ならば誰か我等に敵せんや』。

259
695

眞の平安　定價金參錢　郵稅金貳錢

主耶蘇基督の德行の榮光　定價金八錢　郵稅金貳錢

神のめぐみとダニエルヽマン　定價金拾錢　郵稅金貳錢

言通覽（再版）　定價金五拾錢　郵稅金八錢

差別（新刊）　定價金參錢　郵稅金貳錢

聖書は神の默示（近刊）　四錢　貳錢

同信館圖書案內　進呈

御入用の御方は貳錢切手封入又は往復端書にて御申込被下度候

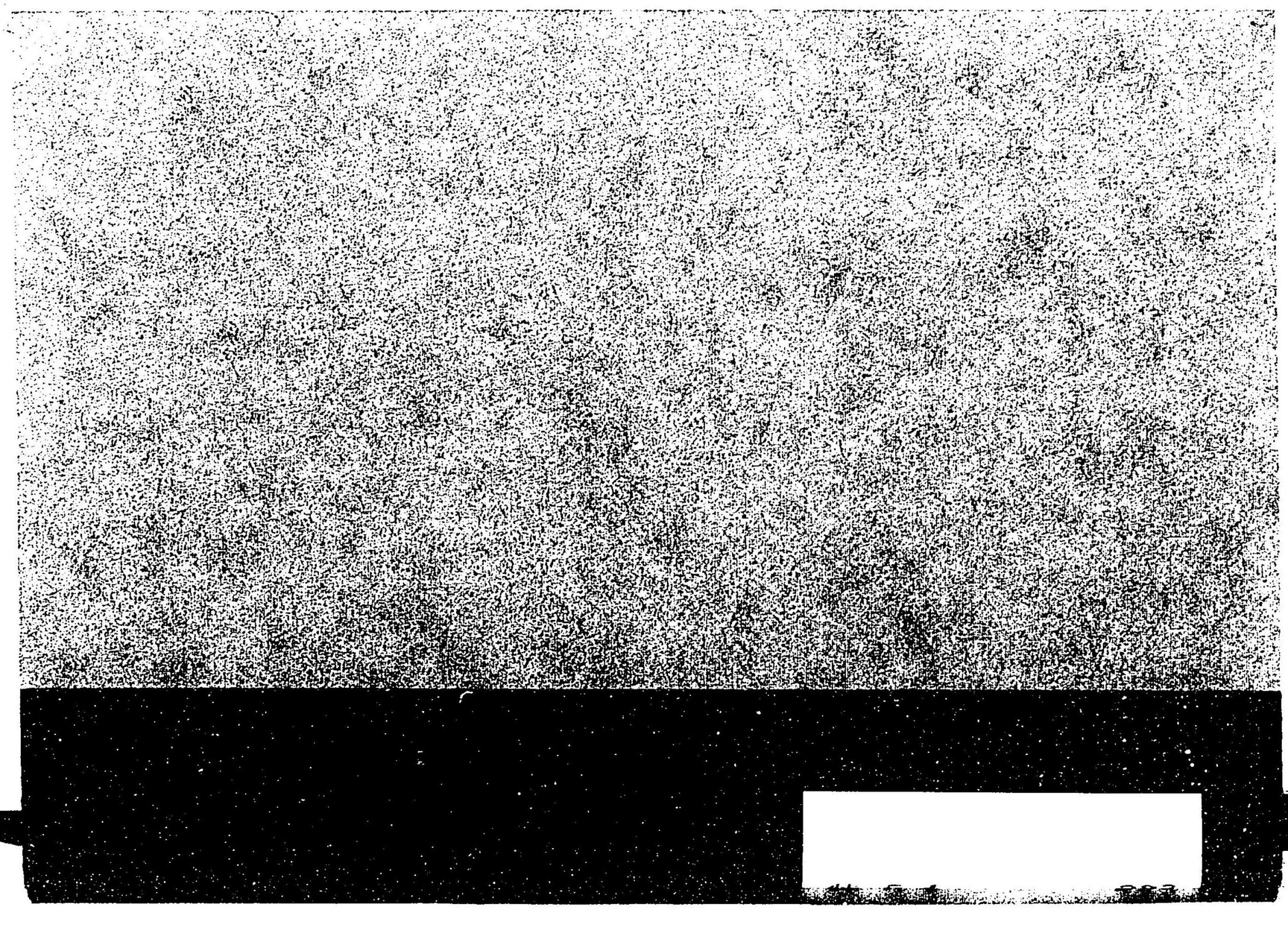
明治四十二年十月十四日印刷　定價金五錢　郵稅金二錢
同　年十月十七日發行
編輯者　東京市神田區錦町三丁目廿四番地　同信館編輯部
發行者　東京市小石川區小日向水道端町二丁目四十番地　淺田正吉
印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　松永米二郎
印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社
發行所　東京市神田區錦町三丁目廿四番地　同信館書店
（振替貯金口座東京壹九五五四番）

聖書及
内外福音書類

同盟館書店

東京神田鮫町
三丁目廿四番地

振替
東京壹九五五四番



特51
283

聖潔の源

国立国会図書館

020413-000-9

特51-283

聖潔の源

ダービー/著

M42

ABI-0222